

3. まちの点検

(1) パラリンピアンとのまちの点検

10月21日、シンポジウム当日の午前中、パラリンピアン、当事者団体代表者とともに、日大通りを通して、下高井戸商店街を訪問（まちの事前点検と同じ店舗）。まちの点検とともに、地元商店との交流を図るなど日本文化に触れていただいた。

Aグループ：ジョー・デラグレーブ氏、チャック・メルトン氏、
菊野弘次郎氏（NPO 法人自立の家）ほか

Bグループ：チャック・アオキ氏、ジョシュ・ウィーラー氏、
グリズデイル・バリージョシュア氏、
村井やよい氏（世田谷区重症心身障害児（者）を守る会会長）
大竹博氏（NPO 法人世田谷区視力障害者福祉協会理事長） ほか



決して広いとは言えない道路のため、安全確保のため学生が前後について誘導するなど配慮した。



踏切の横断時には、溝や段差がある。体力のあるパラリンピアンは問題なく通行できるが、そのような人ばかりではないだろうとの指摘も。



報道陣の同行もあり、大勢での移動となった。



日本の風景を楽しまれている一面も。





店舗では、店内を見て回ったり、店員とディスカッションしたり、商品を購入（試食）したりするなど、交流を深めた。その中で、パラリンピアンより、「店内を動き回れるスペースが作られるとよい」、「誰でも高齢者になるのでバリアフリー化は将来への投資」、「バリアフリーと言っても大きな工事ではなく簡単な工夫でよい」、「来店できる人が増えればそれだけ売り上げにもつながる」、「よくしたいという願望が重要」といった意見が寄せられた。

また、同行者からは、パラリンピアンとの交流を通して「アメリカはボランティアが多いのでハード整備のことはあまり気にしていないと言っていて驚いた」、「店舗で、常に陳列されている商品については点字で案内をしてはどうかと提案していた。他の障害のことも気にかけている様子に感銘を受けた」など、アメリカの障害者の考え方に刺激を受けた様子だった。

(2) 10月4日(金) まちの事前点検

21日のパラリンピアンによるまちの点検に先立ち、日本大学文理学部学生が、当事者役も含めて役割分担をして事前点検を行った。その際の気付きを、21日当日打合せ時に、パラリンピアン等と共有した。

2019年10月4日(金) 下高井戸商店街 まちの事前点検

(日本大学文理学部学生による事前点検)

◎A班

- ・役割分担
- ①インタビュー：三橋・岡崎
- ②写真撮影：高野
- ③当事者役：瀧・佐々木
- ④介助者：池田・渡辺

・訪問店舗

- ①双葉屋(呉服・衣料品店)
- ②三笠屋(和菓子屋)

◎B班

- ・役割分担
- ①インタビュー：中山
- ②写真撮影：泉村
- ③当事者役：遠藤・中路
- ④介助者：古見・吉原

・訪問店舗

- ①漢方薬局 桃仁堂
- ②いづみや(豆腐屋)
- ③お茶のつるや

下高井戸商店街

甲州街道

下高井戸駅

日本大学文理学部

“ずっとしもたが”のこころ

ショッピングタウン 下高井戸商店街(振)

<http://www.ahtotakua.or.jp>

- ・下高井戸商店街は、東西約700m・南北約500mに約300軒の店舗が軒を連ね、食料品関係の店舗が多い。
- ・地域のコミュニティづくりや安心・安全なまちづくりの担い手として、地域に愛される商店街です。



普段通っている道だが、自転車や電柱が多く、障害者にとって危険なものであることに気づいた。



線路の溝に車輪がはまってしまうと危険だと思った。

道路は端の方に傾いているので、車いすを漕いでいると、知らぬ間に端にぶつかってしまった。



A班 ①双葉屋（呉服・衣料品店）



着物や浴衣などの和服だけでなく、バッグやハンカチ、履き物などの実用的なものも取り揃えている。



車いすで入店する際に、自動ドアのスイッチを切って長時間開いた状態にしてくれたため、焦らず入店することができた。



可動式の商品棚を使用していることで、車いすでも通れる幅を確保することができる。



奥にテーブルとイスがあり、お年寄りの集いの場としての役割もある。お年寄りが多いため、杖や歩行器を使うお客様がよく来店する。配慮が必要なお客様が来たときは、声掛けを積極的に行っているとのこと。

A班 ②三笠屋（和菓子屋）



障害者の方の来店はあまり多くないが、
障害があっても差別せずに接客しているとのこと。



商品が低い位置に並んでおり、車いすでも商品を
手に取りやすい。



店内が広く、車いすでも入店しやすい。また、対面式の接客のためお客様のニーズに合わせた柔軟な接客ができる。



下高井戸の名産物の「下高井戸餅」など多様な和菓子を
取りそろえている（試食させていただいた瀧さん）。

B班 ①漢方薬局 桃仁堂



処方箋ではなく体調不良などの時に必要なものを相談に応じて提供する。
商品はお店の方が、来店した方に合わせて商品を持ってくるとのこと。



特に年配者の方に配慮して
最近改修した。



車いすが、中まで入れる
ような動線があった。



神経過敏の方もいらっしゃるため、暖色系の照明でやさしいBGMが流れていた。



車いすの方は月に2,3名ほど来店。耳が聞こえづらい方とのコミュニケーションの取り方としては、筆談で対応するための紙を常備している。

B班 ②いづみや (豆腐屋)



色々な種類の豆腐をはじめ、豆腐関連商品（おから、おからドーナツ、プリン、杏仁豆腐、豆乳、ゆば、がんもどき等）がショーケースに横並びで入っていた。カウンター越しにやり取りをするので入店の必要はなし。



会計は、普段はショーケースの上のトレーを介して行われる。

状況に応じ、お店の方がトレーを下げたり、カウンターの外まで出てきて、商品やお金のやり取りをしたりする場合もある。





聴覚障がいがある方には、電卓で金額を伝えている。区の合理的配慮物品の助成があることを知らなかったが、区の職員が説明をしたところ、前向きに利用を検討したいとのことだった。



お子様連れの親御さんが会計などのために手を離している間、子どもの興味をひくため、おもちゃをカウンターに置いている。

B班 ③お茶のつるや



お客様との距離が近く、一人ひとりに合わせた対応を心掛けている。一回の来店で1時間近くお喋りすることもあり、高齢者の方にとっての居場所にもなっている。



ショーケースの中に高価な急須が陳列されてある。店主とお客様との間にショーケースがあるわけではないので、物理的な距離が近いだけでなく店主さん自身も親しみやすい方であった。



耳が聞こえない方には筆談で対応するため、メモ用紙をたくさん持っている。視覚障がい者の方には急須を触ってもらって紹介する。お茶の匂いを嗅いでもらったうえで購入を決めてもらうこともある。



金銭の授受が難しい利用客に対しては、財布の中身をカウンターの上に出してもらい、お店の方が会計金額をピックアップする。このやり方で視覚障がい者などへ対応している。